

1 研究テーマ

対話を通して考えを深める子の育成 ～児童の問いを大切にした単元構成と対話を促す手立てを通して～

2 研究テーマについて

(1) テーマ設定の意図

学習指導要領（平成29年3月告示）では、問題解決的な学習過程の充実を図る際には、主体的・対話的で深い学びを実現するよう、児童が社会的事象から学習問題を見だし、問題解決の見通しをもって他者と協働的に追究し、追求結果を振り返ってまとめたり、新たな問いを見いだしたりする学習過程などを工夫することが求められている。私はこれまで、子どもたちが主体的に問題解決に向かえるように、身近な教材を選定したり子どもたちが関心をもちそうな資料を提示したりしてきた。さらに、ペアやグループによる対話的活動を取り入れ、協働的な学びになるように工夫をしてきた。しかし、児童の主体的に問題解決しようとする態度を十分に高めることはできず、対話的活動においても自分の考えを発表するだけに留まっていた。これは教師が、児童の問いを十分に引き出せず、児童が自ら見いだした問いを解決する授業ではなかったためと考える。子どもたちの問いを大切にすることで、主体的な問題解決が成立し、解決のために他者と対話する必要感が生まれると考える。

そこで本研究では、「ずれ」や「わからなさ」を喚起し、◎みんなで追求する問いを成立させる手立てと伝え合い学びを深める対話的活動を促す手立てにより、目指す児童の姿の具現を図る。まず、児童が問いを見いだすために「ずれ」や「わからなさ」を喚起させる。この「ずれ」とは既習内容や他者との考えとのずれなどであり、「わからなさ」とは今の知識では説明できない社会的事象である。これらから見いだされた問いを、ICT等を活用して共有した上で、◎みんなで追求する問いを成立させる。対話的活動を促す手立てとして、視覚的に自身と他者の考えを整理できる思考ツールやワークシートを活用する。さらに、「個別最適な学び」の観点から対話的活動の方法を、児童が選択するようにする。こうした手立てを講じることで、対話を通して考えを深めることができると考え、本研究主題を設定した。

(2) 研究テーマに迫るために

① 「ずれ」や「わからなさ」を喚起し、◎みんなで追求する問いを成立させる手立て

授業を展開していくとその時間の学習問題が解決され、児童の思考が安定し、新たな問いを見いだせない場合がある。そこで教師が、児童の安定した思考に一石を投じる資料提示をしたり、発問を行ったりする。このことにより、児童は既習内容や他者との考えとの「ずれ」を感じたり、今の知識では説明できない社会的事象「わからなさ」を感じたりして、新たな問いを見いだす。これらから見いだされた問いを、ICT等を活用して共有するなどして、◎みんなで追求する問いを成立させる。児童自らが見いだした問いから◎みんなで追求する問いを成立することで、追求する意欲を高める姿が期待できる。

② 伝え合い学びを深める対話的活動を促す手立て

これまでの対話的活動では、自分の考えを発表し合う程度に留まっていた。そこで、思考を視覚的に捉え、比較できるように思考ツールやワークシートなどを活用する。さらに、「個別最適な学び」の観点から対話的活動の方法を、他のグループメンバーとの交流やグループ内での交流、オクリンクプラスに提出された他者の考えを参考にするなど、児童が選択するようにする。これらにより、自分にあった対話の方法で主体的に対話的活動に参加し、思考を視覚的に捉えながら、学びを深める姿を期待できる。

(3) 研究テーマにかかわる評価

- ・抽出児A児B児を設定し、抽出児の追求の様相から「主体的に問題解決しようとしているか」「対話によって学びを深めたか」を検証する。
- ・単元実施前後でアンケートを行い、児童の意識の変容について検証する。

(4) 対象児の実態

【A児】社会科は好きでも嫌いでもない

A児は、事前アンケートで社会科は好きでも嫌いでもないと回答している。また、話し合い活動については、話し合うことのよさを実感できず、話し合い活動へ主体的な参加ができていない。本児は自身が疑問に思ったことを調べる活動に楽しさを感じている。本単元では、児童の調べる活動を保障し、意欲的に学習に参加し、友達との交流を通してさらに学びを深める姿を期待する。

【B児】社会科がどちらかと言えば好き

B児は、社会科がどちらかと言えば好きと回答しており、話し合い活動にも意欲的に参加している。また、本児は自身が疑問に思ったことを調べる活動に楽しさを感じている。本単元では、児童の調べる活動を保

障することで、意欲的に学習に参加し、友達との交流を通してさらに学びを深める姿を期待する。

3 単元と指導計画

(1) 単元名

江戸時代 265 年の巻物を作ろう！～文化・学問編～（小学校社会 6 教育出版）

(2) 単元の目標

江戸時代に生まれた文化や学問に関心を持ち、江戸時代を代表する文化や学問について調べる活動を通して、社会が安定するにつれて、町人文化や、蘭学や国学といった新しい学問が生まれたことやそれらに関わる人物の働きが理解できるようにする。

(3) 小単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
- 世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などについて、様々な資料で調べ、歌舞伎や浮世絵、国学や蘭学を理解している。 - 調べたことを年表や文などにまとめ、町人の文化が栄え新しい学問がおこったことを理解している。	世の中の様子、人物の働きや代表的な文化財などに着目して、問いを見だし、この頃に栄えた町人の文化や新しい学問を生み出した人物の業績を考え、適切に表現している。	歌舞伎や浮世絵、国学や蘭学について、予想や学習計画を立てたり、学習を振り返ったりして、学習問題を追究し、解決しようとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画（全 14 時間 本時 7/14）

次 (時数)	学習内容	学習活動	主な評価基準と方法 (評価方法は【 】内で記述する。)
1 (3)	打ち上げ花火の起源を調べ、江戸時代の文化が現在にも伝えていることを理解する。 江戸時代の文化は、どのような文化だったのだろうか。 - 歌舞伎の絵図を見て、気付いたことを発表する。 - 江戸時代の町人文化について調べる。 - 江戸時代の産業と交通の様子を調べる。	◎打ち上げ花火はいつから始まったのだろう。 ◎今も伝わる江戸時代の文化にはどのようなものがあるのだろうか。 ◎江戸時代の産業や交通はどのような発展をしたのだろうか。	主体的に学習に取り組む態度 - 打ち上げ花火の起源について進んで調べている。 【オクリンクプラス】 知識・技能 - 今も伝わる江戸時代の文化について調べている。 - 現在も多くの江戸時代の文化が伝わっていることを理解している。 【オクリンクプラス】 知識・技能 - 交通網が整備されたことや農具の発展で人々の暮らしに余裕が生まれたことにより、様々な文化や学問が全国に広がったことを理解している。 【オクリンクプラス】
2 (9)	「ターヘルアナム」の1部を訳してみる。 - 蘭学や国学について、杉田玄白や本居宣長の業績を調べる - 寺子屋や藩校での教育の様子と役割について調べる。	◎オランダの本にはどんなことが書いてあるのだろう。 ◎西洋の医学書を見たとき、杉田玄白はどんなことを考えただろう。 ◎杉田玄白は、どのような人物なのだろう。 ◎杉田玄白は、どうやって「ターヘルアナム」を日本語に直したのだろう。 (本時) ①② ◎「国学」とはどういった学問なのだろう。 ◎江戸時代ではどのような教育が行われていたのだろう。	主体的に学習に取り組む態度 「ターヘルアナム」を進んで訳そうとしている。 【オクリンクプラス】 知識・技能 - 杉田玄白の思いやどのように翻訳したかを調べている。 【ワークシート】 思考・判断・表現 - 解体新書の出版が日本の医学にどのような影響を与えたのか考えている。 【ワークシート】 知識・技能 - 本居宣長や伊能忠敬の業績について調べている。 【オクリンクプラス】 知識・技能 - 各地に藩校や私塾、寺子屋がつけられことを理解している。 【オクリンクプラス】

3 (3)	もっと調べたい文化や人物、学問についてまとめ、自分の巻物に追加する。	◎江戸時代の文化を巻物にまとめよう。	主体的に学習に取り組む態度 ・自分が調べたいことについて、進んで調べ、まとめている。 思考・判断・表現 ・調べたことについて、分かりやすくまとめている。 【オクリンクプラス】
----------	------------------------------------	--------------------	---

4 単元と児童

(1) 単元について

江戸時代は、平和で安定していた世の中で、江戸や大阪のまちの人々の暮らしが豊かになった。この結果、町人文化が栄え、歌舞伎や浮世絵が流行ったり、蘭学と国学といった新しい学問がおこったりした。新しい文化や学問は、武士の政治や町人・百姓の暮らしにも変化を与え、次の時代への潮流を生み出すことになっていく。杉田玄白が、オランダ語で記された医学書「ターヘルアナトミア」を翻訳し、「解体新書」を完成させた。この翻訳作業の際に「神経」や「動脈」などの現代でも使われている医学用語が生み出された。さらに、「解体新書」が出版されたことで、外国の学問を学ぼうとする動きが強まり、伊能忠敬が弟子らとともに現在の地図とほとんど変わらない日本地図を完成させるなど、日本の学問が発展していった。

歌舞伎や浮世絵はどのような人々に親しまれたか、国学や蘭学はどのような学問だったのかなどの問いを設け、新しい時代の到来を予感させる庶民の活躍を考えさせる。その際、過去の出来事と今日の自分たちの生活や社会との関連が図れるようにすることで、主体的な問題解決につながると考える。

(2) 児童（生徒）の実態

どの教科においても課題に正対して取り組むことはできる。社会科の授業に対する意識調査では「社会科の授業が好きか」の質問に対して、肯定的評価は58%であった。社会科が好きな児童は問いや自分の考えをよく発表するが、そうではない児童の発言回数は少なく、社会科が好きな児童の発言で授業が進んでいくことが多い。「社会科の授業に限らず、どんな授業が楽しいと思いますか」という質問に対して、社会科が好きではない児童のうち69%が、班やグループ、ペアでの話し合い活動と答えた。これら結果から、児童の問いを大切にし、友達と一緒に調べたり、話し合ったりする時間を十分に確保することを通して、社会科が好きではない児童の問いや発言も授業に反映することが、児童の主体的な姿につながると考える。

「国づくりへの歩み」では、単元の学習問題「それぞれの時代の人々の暮らしはどのようなものだったのか、えらい人はどのように現れたのか」を設定した。オクリンクプラスで、児童一人一人の問いを可視化し、単元計画を立て、自分たちの問いを調べる時間を十分に確保したことで、主体的に学習に臨む姿が見られた。対話的活動の場面では、ベン図を用いたワークシートを用意し、縄文時代と弥生時代の人々の暮らしの様子の比較を視覚的に捉えられるようにした。交流場面では、自分で選択した方法で互いに考えを交流し、ワークシートに他者の考えを書き加える姿が見られた。

そこで本単元では、「ずれ」や「わからなさ」を喚起し、◎みんなで追求する問いを成立させる手立てにより、一人一人が問いを見いだせるようにし、オクリンクプラスで共有することで発言が苦手な児童の問いも反映された学習問題を設定し、調べる時間を十分に確保することで主体的に追求する姿を目指す。さらに、自分にあった対話の方法で主体的に対話的活動に参加し、思考ツールやワークシート等で思考を視覚的に捉えながら、対話により学びを深める姿を期待する。

5 本時の展開（令和6年10月31日実施）

(1) ねらい

杉田玄白が解体新書を完成させるに至るまでの方法を調べる活動を通して、地道にあきらめることなく翻訳作業を行ったことを理解し、杉田玄白が正しい知識を広め治療に役立てようと考えていたことに気付くことができる。

(2) 展開の構想

①「ずれ」や「わからなさ」を喚起し、◎みんなで追求する問いを成立させる手立て

本時まで、当時の西洋の医学書と中国の医学書を比較し、2つの医学書を見た杉田玄白の思いを考える。今まで中国の医学書を使用した杉田玄白は、腑分けの場に立ち会うことで、西洋の医学書の精密さに驚き、西洋の医学書の翻訳を決意したことを確認する。その後、翻訳する前の「ターヘルアナトミア」の一部を提示し、辞書無しでの翻訳の難しさを実感させる。児童は、「どうやってこれだけの文章を日本語に訳したのだろう」や「杉田玄白とはどういった人物だったのか」といった問いをもつと考える。これらの児童の問いを共有し、調べていく計画を立てる。本時では、それらの問いを取り上げ、「◎杉田玄白は、どうやって『ターヘルアナトミア』を日本語に直したのだろう。」を設定する。

②伝え合い学びを深める対話的活動を促す手立て

自身の考えと友達の考えを視覚的に捉え、比較できるように思考ツール「クラゲチャート」を活用する。さらに、オクリンクプラスを活用することで、いつでも友達のものを参考にできるようにする。交流場面では、他のグループメンバーとの交流やグループ内での交流、オクリンクプラスに提出された他者の考え

を参考にするなど、児童が選択するようにする。さらに、全体での共有場面では、教師と児童のやり取りだけでなく、オクリンクプラスのリアクション機能を使い、児童同士が良かった考えも積極的に取り上げるようにする。

(3) 展開

時間 (分)	学習活動	教師の働き掛け 予想される児童（生徒）の反応	□評価　○支援　◇留意点
	◎杉田玄白は、どうやって「ターヘルアナトミア」を日本語に直したのだろう。		
	・ 本時の◎を確認し、それぞれの方法（資料、個人、ペア、班など）で調べた内容を共有する。 ・ 調べた内容を全体で共有する。 ・ 諦めず翻訳を続けた杉田玄白の思いについて考えている。	T 1 調べたことを共有しましょう。 C 1 わからない言葉には、印をつけながら調べていったらいい。 C 2 良沢（りょうたく）っていう人が、ちょっとオランダ語を知っていたみたい。 T 2 班ごとに調べたことを発表。 C 3 少しオランダ語が分かった前野良沢という人と協力して日本語に直した。 C 4 でも、知っているオランダ語じゃ全然足りなかったみたい。 C 5 目とか鼻とかわかるものから、少しずつ直していったらいいよ。 T 3 なぜ、杉田玄白は、こんなに時間がかかってまで日本語に直そうとしたのですか。 C 4 正しい知識を広めて、人の命を救いたかったからだと思う。 C 5 正確なものでないと人の命を救えないと考えたからだと思う。	○「蘭学事始」の現代語訳（担任訳）を資料として示すが、タブレットや本、教科書など、調べ方は児童に選択させる。 ○思考ツール「クラゲチャート」を活用し、互いの思考を視覚的に共有しやすくする。 □調べたことを、ワークシートにまとめている。 ○1語や1文を訳すのにどのくらいの時間が掛かったにも着目させることで、杉田玄白の苦労や思いに迫る。 □諦めず翻訳を続けた杉田玄白の思いについて考えている。
	・ 授業をまとめ振り返りを書く。	T 4 今日のまとめと振り返りを書きましょう。 杉田玄白は、正しい知識を広めて治療に役立てようと考え、1語ずつ地道に翻訳した。 C 6 1語訳すのにすごい時間が掛かったのに最後まで取り上げたのがすごい。杉田玄白たちのおかげで日本の医学が発展したと思う。 C 7 辞書もないのに、正しい知識を広めたいという思いで、地道に訳したのがすごいと思う。杉田玄白の努力のおかげで正しい知識が広まったと思う。	○特に、友達と交流を通しての気付きや新たな知識の獲得についてと次時に調べたいことを記述させる。 □本時の振り返りを書くことができる。

(4) 評価

知識・技能

・杉田玄白の思いやどのように翻訳したかを調べている。【ワークシート】

思考・判断・表現

・杉田玄白がどのような思いで翻訳作業を行ったのかを考えている。【ワークシート】

6 実践を振り返って

(1) 授業の実際（指導の実際）

①「ずれ」や「わからなさ」を喚起し、◎みんなで追求する問いを成立させる手立て

6時間目、児童に杉田玄白を「ある挑戦をした人物」と紹介した。杉田玄白を知っている児童もいれば、そうでない児童もいたため、「◎杉田玄白とはどのような人物なのか」を設定し、杉田玄白について調べた。調べたことを発表していく中で、「オランダ語の解剖書『ターヘルアナトミア』を翻訳した」「日本の医学史に偉人」といった内容が出てきた。教師が、「杉田玄白が教科書に載る一番の理由とは何か」と問う

と児童は「ターヘルアナムトミアを翻訳したこと」と答えた。そこで、ターヘルアナムトミアの一部を提示すると、「翻訳してみたい」と声が上がったので、翻訳に挑戦することにした。児童は、AIの翻訳機能を使い翻訳を試みた。しかし、翻訳された内容は、理解が難しいものだった。児童は、「翻訳されても意味が分からない」「人によって翻訳の内容が違う」など、翻訳することの難しさを感じていた。さらに、杉田玄白の当時の状況を実感させようと、パソコンを使わずに翻訳するよう指示した。やはり、児童の手は止まり、「分からない」「無理」といった言葉が聞かれた。ある児童が「辞書を使ったんじゃないかな」と発言すると、「辞書ってあったのかな」「通訳の人に聞いたんじゃないの」と、翻訳の方法についての発言が続いた。そこで、次時の「◎杉田玄白は、どうやって『ターヘルアナムトミア』を日本語に直したのだろう」を設定した。

②伝え合い学びを深める対話的活動を促す手立て

7時間目は◎について調べる時間とし、本時となる8時間目では児童が調べたことをもとに◎に迫る時間とした。その際に対話的活動を促すために2つの手立てを講じた。1つ目は、思考ツール「クラゲチャート」の使用である。思考ツールを用いることで、友達の考えと視覚的に比較できるようにした。2つ目は、「個別最適な学び」の観点から対話的活動の方法を、他のグループメンバーとの交流やグループ内での交流、オクリンクプラスに提出された他者の考えを参考にするなど、児童が選択するようにすることである。7、8時間目ともに、席を立てて友達と一緒に活動する児童もいれば、近い席の友達と一緒に活動する児童もいた。友達と話しはしなくとも、オクリンクプラスに提出された友達のカードを見て参考にしたり、リアクションボタンの機能を使って反応を示したりしていた。

(2) 研究テーマに関わる評価

①「ずれ」や「わからなさ」を喚起し、◎みんなで追求する問いを成立させる手立て（B児欠席）

以下は、手立て①を講じた際の授業記録とオランダ語の解剖書「ターヘルアナムトミア」を翻訳に挑戦してみたの感想の集計結果（表1）である。

T：オランダ語の解剖書「ターヘルアナムトミア」をパソコン無しで翻訳してみてどうでしたか。
 翻訳できましたか。
 C：無理です。
 T：A児さんどうですか。
 A児：全然意味が分かりません。
 T：どの辺りが。
 A児：パソコン使っても、言葉の意味が分からないのに、パソコン無しだと全然分かりません。
 C：おれだったら、絶対あきらめるな。
 C：辞書を使ったんじゃないかな。
 C：え、辞書ってあったの？
 C：辞書は無いかも知れないけど、貿易をしていたんだから通訳の人に聞いたんじゃない。
 C：だとしたら、翻訳に4年もかからないでしょ。

授業記録から、A児は「ターヘルアナムトミア」を翻訳することへの「わからなさ」「難しさ」を感じていることが分かる。さらに、表1から80%の児童が「ターヘルアナムトミア」を翻訳することへの難しさを感じたり、翻訳の方法について考えたりしていることが分かる。これは、オランダ語の解剖書「ターヘルアナムトミア」を翻訳する活動を通して、児童の「わからなさ」を喚起させ、「杉田玄白はどのようにしてオランダ語のターヘルアナムトミアを翻訳したのか」という追求する意欲を高めた姿だと言える。

表1 オランダ語の解剖書「ターヘルアナムトミア」を翻訳に挑戦してみたの感想（27名）

翻訳の方法についての記述	4名(14%)
翻訳の難しさについての記述	18名(66%)
杉田玄白の功績についての記述	15名(55%)

② 伝え合い学びを深める対話的活動を促す手立て

【A児】

A児は、これまで個人で自分の考えをまとめる際は、なかなかまとめられずにいた。しかし、自由に席を立てて調べ活動を行うことで、友達の考えた記述を参考にできるようになってきた。これは、「個別最適な学び」の観点から対話的活動の方法を児童が選択できるようにしたために見られた姿と言える。本時では、A児は、「◎杉田玄白は、どうやって『ターヘルアナムトミア』を日本語に直したのだろう」について、班の友達と一緒に調べ活動を行った。全体共有の場面で班ごとに発表する場面でA児は、自身が記述したことではなく、友達が調べたことを発表した。その後、付け足しと言い友達と自身が調べたことを発表した。授業後の振り返りでは、「オランダ語を杉田さんは前野さんに教えてもらっていて、前野さんは青木先生に教えてもらっていたということが分かって一人の人を、追っていくと色々な人につながっていると分かってびっくりしました。」と記述し、歴史的事象のつながりを捉えている。これは、対話的活動の方法を児童が選択したことで、より主体的に対話的活動に参加し学びを深めた姿と言える。

【B児】

B児は、歴史的事象への関心が高い。◎について調べる場面では、自身と同様に歴史的事象に関心が高い友達と一緒に調べ活動を行った。これは、「個別最適な学び」の観点から対話的活動の方法を児童が選択できるようにしたこと、自身がもっている歴史的事象を友達との活動でより確かにしようと、主体的に話合いに向かおうとした姿と言える。本時では、B児の隣に来た児童と前時で調べた内容を確認するとともに、オクリンプラスで友達の記述を見て「〇〇さんいいね」とつぶやいていた。授業後の振り返りでは、「はじめは杉田玄白は、ただ解体新書を作った人という印象だったけど、学習を振り返って杉田玄白はとても偉大な人なんだと思いました。」と記述している。教師がB児に「なぜ偉大だと思うのか」と問うと、「杉田玄白がいなかったら医療が進歩しなかったと思うし、体の中のことを詳しく書いてある解体新書を出版することで多くの命が救われたと思ったから」と答えた。これは対話を通して、自身がもっていた知識をより確かなものにするともに、杉田玄白の功績に価値を見出し、学びを深めた姿と言える。

(3) 成果と今後の課題

表2は、社会科の授業についてのアンケート結果である。表3から、3つの項目について肯定的評価の数値が上昇していることが分かる。さらに表3の抽出児A児、B児のアンケートから、A児、B児ともに3つ項目について、4月よりも肯定的な評価をしていることが分かる。この結果から本研究で、「ずれ」や「わからなさ」を喚起し、◎みんなで追求する問いを成立させる手立てと伝え合い学びを深める対話的活動を促す手立てにより、児童は、友達との対話に主体的に取り組み、自身の考えの深まりを自覚していることが分かる。

表2 社会科の授業についてのアンケート

	4 月			10 月		
	学級全体	A児	B児	学級全体	A児	B児
①社会科の授業で、疑問をもったり自分の考えをもったりしながら授業に参加していますか。	78%	どちらでもない	どちらかと言えばはい	85%	どちらかと言えばはい	はい
②あなたは、すすんで友達と考えを話し合ったり聞き合ったりしていますか。	78%	どちらかと言えばいいえ	はい	88%	はい	はい
③あなたは、友達と話し合うことで、自分の考えがよりよいものになっていると思いますか。	78%	どちらともいえない	思う	96%	思う	思う

表3は、伝え合い学びを深める対話的活動を促す手立てについてのアンケート結果である。表3から「自由に席を立っての対話」が、自身の学びに有効に働いたことを自覚していることが分かる。これは児童が話しやすい友達と一緒に活動することで、調べ学習や対話活動により主体的に取り組めた結果だと考える。一方で、「思考ツールの活用」に有効性を感じる児童は少なかった。これは、思考ツールによって自身の学びを視覚的に整理することには役立つが、ワークシートのように何をどこに書くかを明確に定めていなかったため、友達が調べたこととの比較がしづらかったのだと考える。

表3 友達と対話（参考に）するとき役立ったと思うことはなんですか（27名、複数回答可）

思考ツールの活用	8名(29%)
自由に席を立っての対話	17名(62%)
タブレットを使用	12名(44%)
班での対話	13名(46%)

本研究では、「伝え合い学びを深める対話的活動を促す手立て」として、「個別最適な学び」の観点から対話的活動の方法を児童が選択できるようにした。これは、児童の主体性に頼る部分が大きく、児童によって対話の内容に差が生じてしまうと考える。どの対話の方法を選択したとしても、児童が対話によって学びを深められたと実感できる手立てを講じることで、児童は社会的事象への視野を広げ、より主体的な問題解決に向けると考える。今後は、どの児童も自分に合った対話の方法によって学びを深められる手立ての在り方を探っていきたい。

参考文献

- ・文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編」2018
- ・文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校社会」 東洋館出版社 2020
- ・北海道社会科教育連盟『「～のはずなのに、なぜ？」を教材化する社会科学習」 東洋館出版社 2022
- ・中越社会科研究会「子どもが追求する社会科 第5集 -主体的な学びを保証する問題解決学習-」 めぐみ工房 2018